連載

司馬遼太郎の街道

「本所深川散歩」「神田界隈」の世界

068

神田にはいろいろな老舗がある。
老舗の印刷会社、精興社もある。
司馬さんは活字にもこだわった。

文＝本誌・村井重俊、太田サトル　写真＝小林　修（写真部）

精興社の本社には、活版印刷で使用した機械や活字が展示されている。出版社の新人研修や学校の社会科見学での利用が多いという（東京都青梅市）

第7回 思い出の活字

私は、一橋講堂のあたりから税務署の通りに入ってゆくうちに、窓のない城砦のような建物があるのをみてうれしかった。印刷の精興社である。拙作も何点かそこの厄介になったが、活字の書体やインキの色のぐあいがじつにうつくしい。

（「街道をゆく　神田界隈」）

司馬さんが「神田界隈」の取材をしていた1990年秋、作家の永井龍男さん（1904～90）が亡くなった。永井さんは神田猿楽町に生まれ育っている。

錦華小学校に永井さんが入学したのは1911（明治44）年。この年4月9日、吉原で大火があった。映画「吉原炎上」の題材となった大火で、吉原遊郭や周辺を含めて約6500戸が焼けてしまった。

昼間の火災で、幼い永井さんは近所でメンコで遊んでいたそうだ。

「いま、吉原が大火なんだよ」

「そうだよ、だからお天とう様が、変な色しているんだよ」

と、友達と話したという。

〈子供ながら火事馴れしている〉と、司馬さんは書いている。

永井さんは新築間もない明治大学の講堂が焼失した事件（1912年）も目撃している。

神田っ子にとって火事はつねにホットニュースだった。

その永井さんが1923（大正12）年に書いた「黒い御飯」という作品がある。永井さんの父親は印刷会社で校正係をしていた。

錦華小学校の入学式前、母親は、永井さんが着る紺がすりの普段着が古ぼけていることが気になっていた。そこで父は、江戸っ子らしい（？）解決策を持ち出す。

〈いっそ染めよう、おれが染めてやる、といった〉

丸染めにすると変な具合になると母親は危ぶむが、父親は言いだしたらきかない。

「子供の着るものなんか、さっぱりしていさいすればなんでも好いんだ。あした少し早く帰ってきて俺が釜で染めてやる」

いつもご飯を炊いている釜で着物を染めた。そのあと母親はていねいに釜を洗ったが、その日炊かれたご飯は黒かった。「黒い御飯」を食べながら、家族の誰かが言った。

「赤の御飯のかわりだね」

入学式のお祝いに赤飯を炊く時代の話である。

◇　◇

都市の品格は、老舗の数できまると司馬さんはいう。

〈老舗のできにくい業種に印刷がある。が、神田にはおどろくべきことに、老舗として精興社がある〉

司馬さんは精興社の活版印刷が好きで、いくつかの著書を精興社の活字でと、出版社にリクエストしている。活版から現代の技術への移り変わりについては、93ページの「余談の余談」をご覧いただきたい。筆者は司馬さんのリクエストを受けていた中央公論社の担当者、山形眞功さんである。

その老舗、神田錦町の精興社の近くを歩きながら、司馬さんは記憶の中の活版工の姿を呼び起こしていた。

〈永井さんの父君のような人が、ほのぐらい電球の下で背をかがめ、めがねごしに鋳造活字の箱を見つめて油だらけになっている〉

それから24年、すっかりデジタルの時代を迎えているが、精興社の社屋はちゃんと神田錦町にある。

司馬さんとゆかりのある方がいた。中村勉さんで、1936（昭和11）年生まれ、現在78歳。ずっと営業畑で、定年後に嘱託となったが、いまも「企画制作部長」の肩書がある。

精興社の創業は1913年で、2014年で101年。中村さんは実に約60年も勤務し、社の歴史の隅々まで知っている。

「うちの会社でもいちばん長く私がいるらしいんですよ（笑）。最近ではお得意さんをまわっても、お世話になった方はひとりもおりませんね」

と、中村さんはいう。

「この30年ぐらいは、地方の県市町村史の関係をやらせていただきました。いったん始まると、長丁場になります。最初は『茨城県史料』で、全50巻ぐらいかな。全部で600冊ぐらいは作ってきました」

司馬さんとの関わりがあったのは1977（昭和52）年だった。

文藝春秋の作品を書いていた司馬さん、校了が迫っていた。

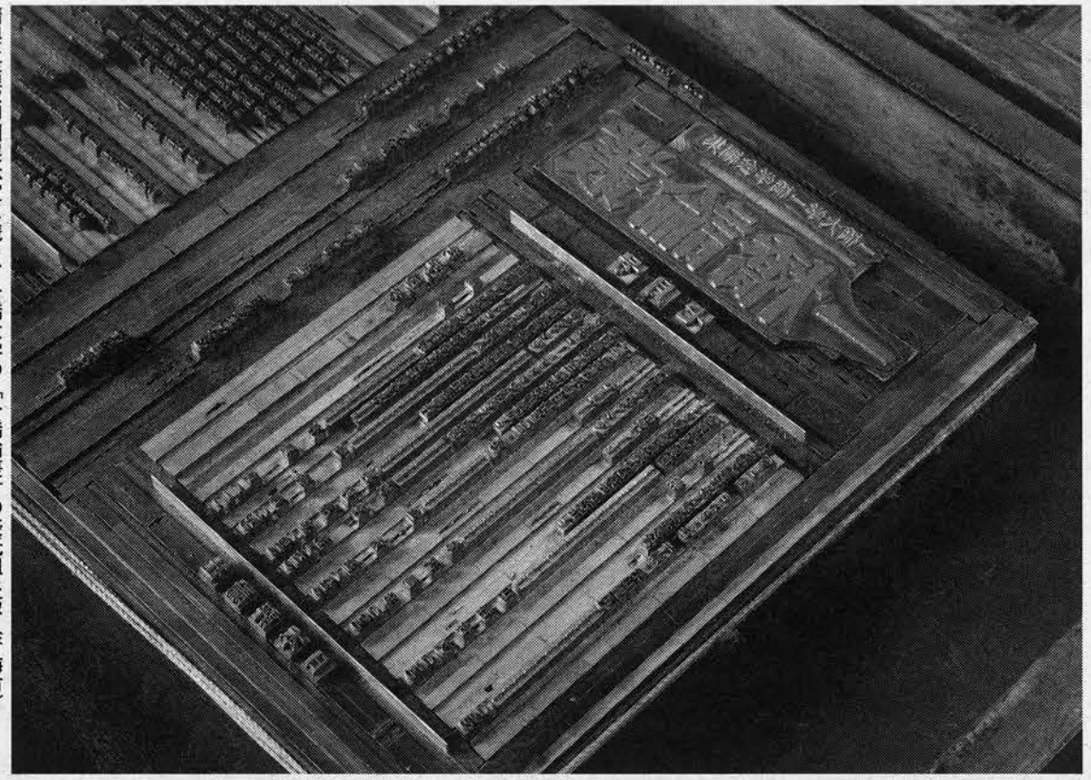
「めったにないことですが、担当の方から、司馬先生と直接校正のやりとりをしてほしいと頼まれました。刷られたばかりのゲラを司馬先生に送り、無事やりとりは終了しました」

後日、はがきが届いた。

〈精興社のお仕事には、昔から、大きな尊敬をもっております。印刷の世界で、精興社のような会社がある

週刊朝日MOOK
司馬遼太郎の街道3
「モンゴル紀行」、「橋原街道」、黒田官兵衛と街道などの世界をオールカラーで
本体920円＋税
好評発売中

「スダレケース」と呼ばれる棚にびっしりと収まる活字。ここから抜き出され版が組まれる。使命を終えた今は、抜き出されることもなく、整然と収まり続ける（青梅市）



精興社活版印刷展示室に残る、一橋大学の「一橋論叢」の表紙組み版（青梅市）

のは、日本文化の誇りだと思っています〉

司馬さんは精興社の仕事ぶりをたたえたあと、さらに続けている。

〈『空海の風景』『木曜島の夜会』のきれいな活字は、愚作の印象をよくするのにどれだけ働いてくれたか、著者であるだけに、骨身にしみて思っております〉

中国西端の新疆ウイグル自治区の取材前日に書かれたものだった。

中村さんは言う。

「宝物ですね。昔は、出版社だったら岩波書店、印刷だったら精興社、製本だったら牧製本印刷と決めて、それが理想であり、夢だといってくださった先生方が多かったんだそうです」

中村さんは、精興社を創業した白井赫太郎と同じ東京都青梅市出身。1955（昭和30）年に入社した。

「私が来たころは、まさに司馬さんが書かれた『城砦のような』木造3階建ての建物でした。いちばん上の窓からは日本橋三越の看板が見えたはずです。まだ都電もたくさん走っていました」

神田の精興社の社屋の一部は、かつては住み込みの寮として使用された。中村さんは約10年間を寮で過ごし、最後は寮長になった。

「ストーブ用の石炭は会社から支給されていましたが、それを焚く薪が必要で、それは支給されません。冬は社員が来る前に会社を暖めておく必要があります。そのため、毎週日曜の朝、上司と一緒に薪拾いをしました。会社のそばはどこでも、歩くといくらでも薪を拾えました」

薪集めが終わると、当時の娯楽はやはり映画だった。

「『太陽がいっぱい』を何回も見ましたね」

神田神保町には神田日活や徳川夢声が弁士をつとめた東洋キネマなど、数軒の映画館があった。小林信彦さんの『私説東京繁昌記』（中央公論社）には、

〈東洋キネマ、略して東キネは、東京でも名門の映画館であり、（略）ジェラール・フィリップの「花咲ける騎士道」や「シェーン」を観ている〉

〈神田は日本における映画館発祥の地でもある〉

とある。

「最初は下積みで、校正をお得意さんに届ける仕事。それを5、6年やりましたかね。最初は自転車で、それからスクーター。昭和30年ごろだと、まだほとんど四輪車は走っていません。一本立ちして営業をやるこ

「司馬遼太郎の街道」は、司馬さんの作品『街道をゆく』の世界を記者が歩くシリーズです

余談の余談

活版から電子書籍まで 印刷を変えた「時代の波」

「神田と印刷」章は、司馬さんの、活版印刷とそれを支えてきた人びとへの挽歌と読める。

「活字や活版が盛大におこなわれるようになるのは、明治初年からである」とし、活字と活版印刷の作業工程が書かれている。

昭和40（1965）年に出版社に就職した私は、4月早々に印刷会社見学。活字鋳造機に始まり、金属製の四角いマッチ棒のような活字が何千本も詰まった活字棚からの文選作業を見る。

手書きの原稿を見ながら、指定の大きさの逆字になっている活字を一字一字、文選箱に拾ってゆく。

次に、本文1ページに1行何字で何行にし、行間はどのくらいに広げるかなどの指定をもとに、文選箱の活字とインテルという薄く細長い金属板などを使って組み版をつくってゆく植字作業。

それからゲラ刷りをとり、何段階かの校正と訂正を経て責了、紙型から鉛版を作製して印刷となる。

こういう工程のなかでとりわけ、文選と植字の、細かで集中力を必要とする大勢の人力作業に圧倒された。校閲と製作のベテランから、1冊の本を出すためにどれだけ人の手がかかっているかを肝に銘じろと、厳しく言われた。

だが、各印刷会社の技術革新が進み、活版印刷は昭和50年ごろにオフセット（平版）印刷に移行してゆく。「活字の書体やインキの色のぐあいがじつにうつくしい」精興社の「手作業としての活版印刷の部門は数年前、歴史を閉じた。時代の波である」。そう司馬さんが書いてから二十数年、いまの組み版形式は電算写植やDTP（デスクトップ・パブリッシング）となった。精興社書体は、電算写植の書体となって活きている。

けれども、印刷による紙の本の売れ行きは振るわず、電子書籍の普及が取りざたされている。司馬さんの「時代の波である」がしみじみ重く感じられる。　山形眞功

ろには、お得意さんとはほとんど顔なじみになっていました」

と、中村さんは回想する。

印刷を請け負う精興社があれば、出版社も製本所も、みんな神田に集中していたのである。

営業部企画・制作室長、小山成一さんがいう。

「現在の神田は古本とスポーツ用品、楽器店の町といった印象が強いですね。しかし、印刷は千代田区の重要な産業でした。工場こそありませんが、出版社がたくさんあって地の利がいいので、今も印刷会社の事務所はいくつか残っています」

小山さんも1975（昭和50）年入社のベテラン。中村さんよりはずいぶん後輩だが、活版印刷になじんだ世代だ。活版の文字は、目にやさしかったと小山さんはいう。

「紙に押して印刷するわけですから、そのぶん太くなるんです。そこまで計算して細くつくられているんですね。押して印刷しますから、字の周りに微妙な縁がついて目にやさしくなります。今も『活版ぽく印刷してほしい』という注文がくることがあります。そんなときには、インクがにじみやすい紙を使って、わざとにじませたりすることもあります」

活版の書体は現在の「精興社書体」に受け継がれている。独自の明朝体で、ひらがなのカーブは健在。

小山さんは「神田界隈」を読んで驚いたという。

「精興社の『興』の字の中央が〝口〟じゃないんですよ。正確に〝コ〟となっています。初代社長の赫太郎が社名を決めるとき、易学者に相談して1画減らした『興』を使いました。パソコンなどでは出てこないし、ホームページでもこの字は使えません。ロゴみたいなものです。普通はなかなかそう表記されませんし、『興』で構わないのですが、司馬先生がおっしゃったんじゃないでしょうか。驚きましたし、うれしかったですね」

司馬さんの精興社へのこだわりがよくわかる。

◇　◇

精興社が完全に活版印刷から撤退したのは1995年。司馬さんが神田を歩いた90年も、もはや主力ではなかった。

〈「活版工の碑」

などは、むろんない〉

しかし、司馬さんは書く。

〈永井さんの父君のような、明治の活版工の姿を思いうかべると、胸があつくなる〉

活字にこだわる人々へのエールだった。

協力・司馬遼太郎記念財団